

十二山ノ神の信仰と祖霊観（拾遺）

プロジェクト2 研究員
東洋大学ライフデザイン学部 教授
菊地 章太

はじめに

本研究は山古志における十二山ノ神の信仰を考察の対象とし、たえまなく続いてきたその信仰を成り立たせているところの祖霊観のありようを探ろうとする試みである。これまでに旧村内にある十二神社をたずねて現状を記述し、山ノ神にまつわる伝承とその祭祀について聞き取り調査と文献資料の考察を行なった。これによって山古志の人々が山ノ神をどのように祀り、何を祈願したのかを明らかにしようと試みた。さらに山古志の周辺地域における十二山ノ神の信仰に目を向けて信仰圏の広がりを理解するとともに、どのような人々がその信仰を当地にもたらし、それがどのような道筋を経て伝わってきたのかを考えてみた。

前回までの調査では、目標である祖霊観については十分な考察ができなかった。そこで今回は旧村内の墓地をたずね、先祖祭祀のありようを見わたすことを通じて、この問題に近づく手がかりを得てみたいと思う。以上をふまえたうえで、祖霊観の形成過程をどのように捉えることができるだろうか。山古志の人々の心を山につなぎとめているものも、おそらく先祖のいます山々への思いとつながっているのではないかと予想される。

1. 山古志の墓地をたずねて

山古志地区における墓地の概況について、現地での

見聞によって知りえたのは以下のことがらであった。

平地にめぐまれない山古志では、開墾できる土地があればそこは田畑にするのが普通だという。山裾や林の中など田畑にできない場所に墓を立てることが多い。集落ごとに共同墓地がいくつかあるが、マキと呼ばれる同族ごとの墓地も少なくない。規模の小さい墓地が目立つのはそのためであろう。地面をそれほど占有しなくても火葬が普及したのも同じ理由にもとづいている。単独で屋敷の脇に墓を立てることもある。宅地内に墓をもうける屋敷墓は全国各地に見られ、必ずしも墓理法（「墓地、埋葬等に関する法律」）によっているわけではない。山古志の寺は檀家をもたないので寺には墓はそれほどない。菩提寺は長岡市をはじめとする周辺の寺院にあるという。

今回訪れることができた山古志地区内の墓地は以下のとおりである。

梶金では集落のはずれの一段高くなったところに共同墓地がある。林間というにふさわしい立地である。木籠では山裾にある大木の下に墓石が並んでいた。集落には同族ごとの墓地が多いという。小松倉では水沢方面へ向かう国道の左手に共同墓地が二ヶ所ある。ここでも同族ごとに墓が立てられている。檜木では集落の東側に共同墓地がある。今回は道路が閉鎖されていたため訪れることができなかった。

檜木の墓地は中越地震による地滑りで下半分が崩落した。地震の翌々年の2006年に再建されている。地震のあと地盤がゆるいままになっていて住宅の建築許可がおりず、そのため集落全体が集団移転することに

なった。住宅よりも墓地が先に再建され、その後に神社が再建されたのである。なお、再建された十二神社についてはすでに報告した⁽¹⁾。新築の家屋は集落を見おろす高台に建てられた。もとの畑では今も耕作が続けられている。住宅の移転先に墓地を移す計画は当初からなかったという。崩落をまぬがれた墓地の上側の土地を所有者が提供したので、新たな墓地区画として整備された⁽²⁾。

種芋原では集落の規模が大きいため墓地もいくつかある。そのうち中野地区では半蔵金方面へ向かう国道から左に入った道の左右に共同墓地がある。下村地区の墓地もやや大きい。どちらも木々のあいまに墓が立っている。上村墓地では浄土真宗広照寺の裏手に墓がかたまっていた。集落では共同墓地をハカンドと呼んでいる。家ごとに墓地を設けるところも少なくないという⁽³⁾。

池谷では県道をはさんで集落の向かい側に「観音堂の墓地」と呼ばれる共同墓地がある。木立に囲まれた中に小さな観音堂がある。もとは集落の一族の内鎮守であったが、そこに墓を集めたのである。地震による墓石の倒壊はあったが、墓地自体は無事であった。観音堂へ通じる道の被害は義援金によって復旧された。

油夫では集落の中ほどに共同墓地があり、県道の左右にも個人宅の墓が散在している。これをハカドコと呼んでいる。竹沢では集落をぬける道沿いに共同墓地がある。まわりは木々でおおわれていた。桂谷では家々が立ち並ぶ坂道を登っていった先に共同墓地がある。背後は山である。虫亀ではかつての闘牛場の近くに共同墓地がある。山がせりあがっていく中ほどのいくらか平坦な場所にあり、その先は諏訪神社の森がひろがっている。浄土真宗念法寺の裏手にも墓がいくつかあった。

上述したとおり、山古志では墓地が狭隘であるためか火葬が早くから普及した。『越後風俗志』は「越後風土考に曰く」として、「何方にても段々地所の没すること多きを以て天正の末より最寄の火葬場又墓場と云ふを定め取まとめしものなり」と記している⁽⁴⁾。旧

村内では種芋原で明治の中頃に始まったという。火葬場は地区ごとに設けられており、ヤキバ、ソウレイバ、オンボヤなどと呼ばれている。同族ごとに、もしくは重立という個人で設ける場合もある。火葬の煙が農作物や蚕によくないと言って、竹沢はじめいくつかの地区では農繁期や蚕の最盛期には火葬場を使わず、近くの山で茶毘に付すこともあったという⁽⁵⁾。

山古志ではイモジガエリといって、あの世から生き返った話、いわゆる蘇生説話が数多く伝承されている⁽⁶⁾。いずれも旧村内のほぼ全域から採集されており、その有無は土葬や火葬などの葬法とも関連するところがある。死ぬには早すぎると言われてあの世から呼び戻される話、現世にやり残したことがあって死にきれずに戻ってくる話、神仏の加護によってよみがえる話などさまざまである。生き返ったあとにあの世で見てきたことを話すというのもある。ほとんどが昔話として語られてきた。

伝承が確認されていない集落のうち、寺野・油夫・菖蒲などは人口の減少によることが考えられる。しかし小松倉と木籠では死者の蘇生について他の地区とは異なった観念があるとされている。小松倉は現在は中山トンネルによって魚沼市水沢に通じているが、かつては村でも奥まった場所にあたるため冬になると交通もとだえていた。火葬の普及がもっとも遅れ、『山古志村史』が編纂された1980年代においても土葬が行なわれていた。

土葬の場合には遺体を埋葬したあと、死者の霊力を恐れることがはなはだしかろう。死霊を封じ込めるために土饅頭を築いたり、現世との境界を示すべく石を並べて埋葬地を囲むことが行なわれてきた。小松倉の墓地にはこうした習俗の名残が見うけられるという。このように死霊に対する恐怖が著しかったために、他の地域のように蘇生説話が伝承されなかったのではないかと考えられている⁽⁷⁾。



梶金集落墓地



木籠集落墓地



小松倉集落墓地



楢木集落現状（2010年12月16日撮影）

2. 墓がになっているもの

中越地震による墓地の崩落や墓石の倒壊は地区によってさまざまであった。現在はそのほとんどがすでに再建され、あるいは整備し直されている。

地震後に被災住民が墓や葬儀に対してどのような意識を抱いたか。また、そこからの復興の過程で墓や葬儀のありようがどのように変化したのか。以上の疑問に焦点をあて、2008年2月と10月の2回にわたり、地域文化研究班の井上治代によって山古志地区の住民を対象とした聞き取り調査が行なわれた。また、同年3月には東洋大学によるオープン・リサーチの一環として山古志地区の全世帯を対象としたアンケート調査が行なわれたが、そのおりに上記の点に関連する質問項

目が盛りこまれた。以上の調査結果はすでに井上によって論考としてまとめられている⁽⁸⁾。ここではその成果のなかから墓に関連する箇所を抽出し、そこからうかがうことのできる祖霊観のありようについて考えてみたい。

基本的な問題設定は次のとおりである。中山間地域に暮らす人々にとっては、先祖伝来の土地や仕事を受けついで、ひとつの地域に定住して暮らしていくことが、おそらく都市部に暮らす人々よりも多いと思われる。先祖とのつながりを意識して生活する機会も豊富であろう。そうした先祖伝来の土地が地震によって崩落し、先祖が眠る墓が倒壊したとき、心にどれほどの衝撃を受けたのか。そのような問題設定のもとに、「お墓が倒壊したとき、どのようなことを感じましたか」

という質問が自由回答形式でなされた。

調査が行なわれた地震後4年目の時点では、いまだに墓石が倒壊したままのところもいくつかあった。地震直後には墓から遺骨が露出していたところもあったという。遺骨がむき出しの状態ですらさらされ、あるいは散乱していた。言葉にできないほど痛ましい姿として目に映った。そのままにしておくのが忍びなく、遺骨を拾い集めて仮設住宅にいっしょに避難させたという人もいた。

次のような記述もあった。「お骨が全部見える状態でありましたので一応ブルーシートをかけて風で飛ばないようにお墓の石で固定して『雪が消えるまでじっとまってください』と合掌しました。生きていればこそと思い、『ごめんなさい』ということをお骨に

向かって言いました」

地震そのものに対する衝撃の大きさはもとより、今まで揺らぐことのなかった先祖との一体感までもが地震によって崩れてしまった。先祖の遺骨が無残な姿になっていたことが、どれほど人々の心に大きな傷を負わせたかは想像するにあまりある。そのことが、何よりも先に墓地を復旧したいという思いに結びついたのであろう。しかし、避難生活の身ではすぐにはそれを実行できない。ご先祖さまに申し訳ないという思いでいっぱいだった。まっさきに直してあげなければと思ったけれど、それがかなわないのが何より心苦しかったという。

住民の方々への質問が「墓」に関するものであったにもかかわらず、「故郷」を強くイメージした人が多



種芋原下村集落墓地



種芋原上村浄土真宗広照寺墓地



池谷観音堂墓地



池谷観音堂墓地

かったようである。これについて井上は、「何代もの先祖が暮らし、自分もそこで生まれ育った故郷、そしてそこで暮らした歴代の人々が眠る（墓がある地）故郷を喪失したくないという思いが強かったようだ」と述べている⁽⁹⁾。帰村せずに他へ移住した人のなかにも、墓だけは山古志に残して、いつかは故郷である山古志に帰りたいと願っているという。

地震とそこからの復興を通じて改めて認識されたのは、子孫を伝えていくなかで墓が大切な役目になっており、いつときもゆるがせにできないところだということ、それはまた心の安らぎの場であるということだった。「墓のありがたさが身にしみた」という言葉もあった。

地震後の帰村をめぐる生じたさまざまな問題については、2007年から3年間にわたって新潟県立歴史博物館を中心に総合調査が行なわれ、研究成果報告書がまとめられた。そのなかで、旧山古志村における墓地の状況とその役割が地震後にどのように変化したかが論じられている⁽¹⁰⁾。

調査は榎木地区と池谷地区を対象に行なわれた。どちらの地区でも、地震以前から世帯の転出にともなって先祖の墓をそのまま残すかどうかという問題は潜在的にあった。しかし、結果として地震がきっかけで墓を移転することはなかった。転出した人々が墓参りに訪れる機会は、かえって復興後に多くなった印象があると語られている。墓参りやお盆の行事を通じて、帰村者と転出者の結びつきが維持されているという。

3. 先祖祭祀のありよう

墓参りは小松倉では初七日過ぎに行く。竹沢では四十九日前とされている。しかしほとんどの地区では改めて墓参りはしないそうである⁽¹¹⁾。

両墓制の行なわれているところであれば、むしろこれが普通であろう。そこでは遺体を埋葬する墓地とは別のところに、墓石などの石塔を立ててお参りするた

めの墓地が設けられている。柳田國男は前者の埋葬墓地を「葬地」と呼び、後者の墓参用の石塔墓地を「祭地」と呼んだ⁽¹²⁾。のちには「第一次墓地」と「第二次墓地」の語も用いられた⁽¹³⁾。現在では前者を「埋め墓」とし、後者を「詣り墓」とすることが多い⁽¹⁴⁾。このように一人の死者のために二つの墓を設ける習俗を、民俗学や歴史学では両墓制と呼んでいる。

詣で墓は集落内の共同墓地か寺院に附属する墓地に立てられるのが一般的である。墓参りに訪れるのはこちらである。埋め墓は集落からよほど離れた場所に設けられることが多い。村の共同になっているか、もしくは同族別にかたまっている。地域によっては山中や海岸近くにあつて、足も踏みこめないような場所にあることもめずらしくない。埋葬の翌日に遺族が土寄せにおもむく程度で、次にお参りするのとはもっぱら詣で墓の方である。

その後も、四十九日までは埋め墓へ行くところもあるが、あとはほとんどお参りすることがない。この点は山古志の事例と共通している。しかしここには、埋め墓と別に設けられた詣り墓はまったく存在しない。

両墓制の分布は、九州と東北地方をのぞいてほぼ全国的に見られる。近畿地方にはとりわけ顕著だが、関東地方や中部地方の一部にもある。ただし北陸にはほとんど見られないとされてきた。新潟から富山、石川、福井までの一帯は、かつて「両墓制の処女地帯」と呼ばれたほどである。この地域で真宗がさかんに信仰されていたことと関係するのではないかとも言われている⁽¹⁵⁾。真宗では遺骨の一部を大谷本廟に納めるだけで墓を立てないところがある。

わずかな例だが、西蒲原郡間瀬村には小高い丘の松林のなかに埋め墓があった。遺体を埋めてから石を積み、小さな木を挿しておく。そのあとは近寄る人もなく、三、四年もたつとわからなくなったという。「拝み場所」は寺の境内にあり、そこには先祖代々の墓が立ててある。お盆のときはそこへお詣りした⁽¹⁶⁾。南魚沼郡六日町（現在、南魚沼市）でも同じような墓があった。今はひとつになっている。

その後、日本民俗学会をはじめとする九学会連合による共同調査により、佐渡の南側の海岸一帯に位置する小木町・羽茂町・赤泊町などに両墓制のあることが明らかにされた⁽¹⁷⁾。また、新潟県教育委員会による民俗調査により、県の最北に位置する岩船郡山北町鵜泊に過去に両墓制が行なわれていたことが確認された。海をはさんで向きあう粟島では調査の時点でなおも行なわれていたという⁽¹⁸⁾。このほか東蒲原郡津川町津川や中頸城郡柿崎町上下浜でも、かつては埋め墓と区別された墓が存在したことが知られている⁽¹⁹⁾。

いずれにしても旧山古志村や長岡市の周辺では、両墓制の痕跡は今のところ確認されていない。それに代わる先祖祭祀の方法も特に伝わっていないようである。したがって、埋葬後に改めて墓参りをしないとい

うことも、別の理由を考えてみる必要があると思う。

十二山ノ神の信仰について調査していたときに感じた祭礼の篤さにくらべ、葬礼はやや簡素な印象があった。地震後に語られた墓への思いや墓地再建への情熱からすれば、やや意外な気もする。

そもそも山古志では彼岸の墓参りはあまりしないという。秋は農繁期にかさなり、春は墓地全体がまだ雪に埋もれている。お盆のときだけが墓参りの機会であるという人が少なくない。かえって先祖への思いは、お盆のときに集約されているのだと思う。

池谷では八月十二日の夕方に迎え火をたく。「じいこたち、ばあこたち、この明かりについて来なはれ、来なはれ」と言ってご先祖さまをお迎えするという。

種苧原では十三日の夕方、山で採ってきた萩の花と



油夫集落墓地



竹沢集落墓地



桂谷集落墓地



虫亀集落墓地

提灯、線香、ろうそくを携え墓に行き、スカンポの筒に入れたろうそくに火をともしてお参りする。虫亀では茄子や胡瓜や夕顔を賽の目に切って供える。

桂谷ではご先祖さまをお迎えに行き、線香を墓に少し残しておき、残りは火をつけたまま持って帰る。この煙に仏さまがついていらっしゃるという⁽²⁰⁾。

いずれも全国各地に通有の民俗ではあるが、ここ山古志では春秋のお彼岸にお参りできない分まで、ご先祖さまにおもてなしをするようである。ご先祖さまの霊もまた次の年を楽しみにして帰っていく。

いったいどこへ？

4. 祖霊のおもむくところ

柳田國男に「魂の行くへ」という文章がある⁽²¹⁾。

「魂になつてもなほ生涯の地に留まるといふ想像は、自分も日本人である故か、私には至極楽しく感じられる。出来るものならばいつまでも此国に居たい。さうして一つの文化のもう少し美しく開展し、一つの学問のもう少し世の中に寄与するやうになることを、どこかささやかな丘の上からでも、見守つて居たいものだと思ふ」

この世とあの世との間がそれほど隔たったものとは考えられていない。それどころか「丘の上から」というほどに隣りあっていると語られている。山にかこまれた土地に生まれ育った人にとって、亡くなった父や母の魂は山にいて、子どもたちが世に出て働いていくのをそこから見守っている。十萬億土の遠いかなたになど行きはしない。そのことをこの日本民俗学の開拓者はくりかえし述べている。

人が亡くなって年月が過ぎれば、それからあととはご先祖さまという一体のものになる⁽²²⁾。肉体は朽ちても、親しい者との縁は切れることなく、年ごとに日を定めて子孫の家と行きかう。つねの日はふるさとの山にやすらっている。

海辺で生まれ育ち、いつも海を見ながら暮らしてい

る人々にとっては、亡くなった人の魂は海のかなたにいるのかもしれない。生活の中に海のある人が、一生を終えたあとにやすらう場所は、海辺の墓地であったろう。山を眺め暮らし、山が生活の中にある人にとって、靈魂のおもむく所は、山の中に、あるいは山の上に、あるいは山の向こうにあるのかもしれない。

山とはいっても、家屋敷のうしろにひかえる小高い丘であったり、こんもりした森であったりもする。谷でさえほとんど同じではなかったか⁽²³⁾。おしなべて周囲の近い自然のふところに、靈魂の住まう場所があると観念されている。

いったい祖霊に対する信仰というのは、民族のあらゆる信仰を吸収し同化させながらはぐくまれてきたと考えられている⁽²⁴⁾。とりわけ祖霊が山中にとどまるというところに、山の神霊とのつながりが生じているのではないか⁽²⁵⁾。ここに山ノ神信仰と祖霊観の接点を見いだすことができると思う。

これは山古志に限らないが、山ノ神を祀る神社や祠が山頂付近に設けられることは必ずしも多くない。むしろ集落の近くか山裾の傾斜がゆるやかな場所が選ばれている。集落からの道が山に向かうところだから、共同墓地や同族の墓が設けられる場所といくらか隔たらない。寺院とちがって神社と墓地とは本来無関係だが、山古志では両者はかなり近い場所にある。山ノ神が家々の内鎮守として祀られているのも、屋敷内でなければ家屋敷の裏山というのがほとんどである⁽²⁶⁾。

屋敷神や同族神として祀られる神々の中に山ノ神が座をしめていることが多いのは、その祖霊的な性格によるためと考えられている⁽²⁷⁾。山ノ神がそうした性格をもつ要因の中には、山がかつて遺体を葬る場所であったという事実がひそんでいる。山を埋葬地とするがゆえに死霊の集まる場所と見なすのは古くからの習俗でもあった⁽²⁸⁾。ここに先祖の靈魂と山の神霊とが融合していくきっかけがあるにちがいない。

こうした思いがやがて山岳崇拜に結びついていく。越中の立山、熊野の妙法山、伊勢の朝熊山などの名だたる山岳霊場が開山されたその基盤には、山に死者の

霊が集まるという信仰があった。高野山の山麓に古くから伝わる習俗があって、今も四十九日の忌明けに「骨のぼせ」が行なわれるという⁽²⁹⁾。

山古志から望まれる八海山も山岳霊場として崇拝されてきた。山麓から登山道に沿って無数の霊神碑が並んでいる。銘記による限りはおおむね故人の供養碑である⁽³⁰⁾。これは木曾の御嶽にも同様のものがあり、故人の家族や講中が建てたものだが、存命中に建てる逆修の碑もあるという⁽³¹⁾。いずれも死者の霊魂が山にとどまるとする山中他界観、あるいはそれを供養することによって神霊に昇華するという祖霊観にもとづくものであろう⁽³²⁾。

もちろんそうした崇拝を集めるのは、霊山と称えられる場所には限らない。山また山の日本列島には、死者のおもむく山はそこかしこにある。ご先祖さまは朝な夕なながめ暮らす山々にやすらっている。

先祖の霊魂は、しかし山にいただけではなかった。上述のとおり地震で墓が崩れたとき、そこにご先祖さまが眠っていることを多くの人が語っていた。それだけではない。仏壇の中の位牌にも宿っている。そんな思いを語った人もたくさんいたのである。

地震のあとで位牌だけは持ち出すことができた。けれど仮設住宅ではきちんと置く場所もなく、お線香もあげることができなかった。早く家に帰って仏壇に入れてあげたい。

こんな言葉もあった⁽³³⁾。「お花もそなえる場所がなく、先祖様には毎日申し訳ないと思いながら手を合わせ、山古志へ帰るまで我慢して頂くよう話しかけていた」

葬送儀礼の長い歴史の中で、位牌は故人の霊魂が依りつき留まるものと信じられてきた⁽³⁴⁾。かくしてご先祖さまは位牌の中にいる。墓の下にもいる。山の向こうにもいる。

それは矛盾することかもしれない。けれども、それはそのままおさまっている。分析はかなわない。

先に逝った人が、仏壇の位牌の中において、家族が無事に帰宅するのをいつも待っている。

墓の下で眠りながら、雪どけを待ちわび、夏の夕暮れに迎えにくるのを待っている。

山の向こうから、つらい日々を耐えて生きている肉親を見守っている。いつかは私たちもそこへ行く。それを楽しみに待っている。

先祖の霊魂と山の神霊とがここで一つに融けあっていく。山ノ神の祭りはやがて祖霊祭に結びついていくのである。こうした観念が形成されるにあたっては、上述のとおり山が葬りの場であったことも見逃すことはできない。そこにご先祖さまの魂もやすらっているという心性がはぐくまれてきたのであろう。そして山ノ神が祖霊的性格をもつがゆえに、そのまま家の神として、あるいは同族神として、さらに村民の神として村の鎮守に祀られるようになったのである。

おわりに

中越地震の直後、当時の長島忠美村長は全村民を村外に避難させる「全村避難」を決断した。翌日から自衛隊や県警のヘリコプターによる村民の救出が始まり、村民のほぼすべてが村を離れた。

避難完了後に村長は「皆で山古志村へ帰る」という目標を語った。これがやがて「帰ろう山古志へ」というスローガンにつながっていく。呼びかけに応じ、村民の大多数が山古志への帰村に希望をつないだ。しかし、河道閉塞や例年のない豪雪によって被害が深まり、離村を決断する人も少しずつだが増えていった。

集落によって被害の度合もさまざまだった。復旧のめどがまったくたたずに一集落がまるごと移転したところもある。それでも多くの人々にとって帰村への思いはなんとも強いものだったようである。先祖伝来の土地であることはもちろんだが、それとは別の次元でも心をつなぎとめているものがあるように思えた。

被災後の村ではいち早く水没した墓地が再建されている。おどろくべきことに道路や橋が復旧されるよりも早かったのである。

山古志は八犬伝の昔から鬪牛でその名を全国に知られており、再開へ向けての動きもすみやかだった。これほどに目立ちはしないものの、村では古くから十二山ノ神が信仰されており、その祭も帰村後まもなく行なわれた。神さまがいる山々に、ご先祖さまもやすらっている。そうした思いが、そこにはあるように感じられた。「帰ろう山古志へ」という言葉は、やはり「山へ」帰るという意識につながっているのではないか。

地震からすでに6年が経過した。被災体験の記録をもとに、さまざまなかたちで調査研究が試みられてきた。その成果はすでに多数刊行されており、今後の復興支援のありようを視野に入れた批判的考察も行なわれている。とりわけ新潟大学による報告のなかで、復興とは「被災者を、彼らのもつ記憶や暮らしてきた場所と切り離して新しい街をつくることではない」とあったのが注意される⁽³⁵⁾。

そのおりの聞き取り調査によれば、山古志に戻ってきた人も離れていった人も、かつての暮らしをなつかしみ、山の暮らしのよさを思い出すことが多かったという。そこで語られたのは、自然の美しさや暮らしやすさであり、人と人とのつながりのあたたかさに他ならない。それはまた地震によって奪われてしまったものでもあった。

山古志に帰るということは、そうした記憶と結びついた場に戻っていくことであろう。おそらく人々が取り戻したいと願ったのは、なによりも「もとの暮らし」ではなかったか。より便利な暮らしでも、より活性化した集落でもない。それまでの日常を回復することであったろう⁽³⁶⁾。

もとどおりの暮らしの中には、季節ごとの行事もきっと含まれている。本研究が主題としてきた山ノ神の信仰や十二神社における祭礼も、それまでの日常を構成していた要素であったと思う。そしてまた、夏が来るたびに家族でお墓参りに行くことも、そこに含まれているにちがいない。

略記

『通史』 山古志村史編集委員会編『山古志村史通史』山古志村役場、1985年

『民俗』 山古志村史編集委員会編『山古志村史民俗』山古志村役場、1983年

注

- (1) 拙稿「十二山ノ神の信仰と祖霊観（中）」『福祉社会開発研究』第2号、2009年、p.170.
- (2) 岩野邦康「墓から見た帰村 — 墓地・石塔をめぐるイエとムラの現在」平成19年度～平成21年度科学研究費補助金基盤研究（C）研究成果報告書『中越地震後の山古志への「帰村」に関する民俗学的研究』2010年、p.60.
- (3) 『民俗』 p.325.
- (4) 温古談話会編『越後風俗志』第一輯、1895；国書刊行会、1990、p.36.
- (5) 『通史』 p.932、『民俗』 p.319-320.
- (6) 『通史』 p.925、『民俗』 p.326. 旧村内から採集された三十話が「蘇生説話資料」として『民俗』（pp.342-365）に収録されている。
- (7) 『民俗』 p.331.
- (8) 井上治代「被災住民のメンタル・クライシスと葬送文化の変容 — 新潟・山古志住民の事例から」『福祉社会開発研究』第2号、2009年、pp.175-180.
- (9) 同論文、p.176.
- (10) 岩野邦康、前掲論文、pp.55-61.
- (11) 『民俗』 p.323.
- (12) 柳田國男「葬制の沿革について」『人類学雑誌』第44巻6号、1929年；柳田國男全集第28巻、筑摩書房、2001年、p.99.
- (13) 柳田國男『葬送習俗語彙』民間伝承の会、1937年、p.144.
- (14) 「埋め墓」と「詣り墓」の呼称は民俗学で用いられる述語であり、実際に伝承されてきた語彙はきわめて多様である。以下に詳細な事例が報告されている。新谷尚紀『兩

墓制と他界観』吉川弘文館、1991年、pp.49-54.

- (15) 最上孝敬『詣り墓』増補版、名著出版、1980年、p.140.
- (16) 牧田茂「葬制」柳田國男編『海村生活の研究』日本民俗学会、1949年、p.264.
- (17) 九学会連合佐渡調査委員会編『佐渡 — 自然・文化・社会』平凡社、1964年、p.192.
- (18) 新潟県文化財調査年報第五集『新潟県の民俗』新潟県教育委員会、1965年、p.356.
- (19) 最上孝敬、前掲書、p.290.
- (20) 山古志村写真集制作委員会編『ふるさと山古志に生きる』農山漁村文化協会、2007年、p.99.
- (21) 柳田國男「魂の行くへ」『若越民俗』第5巻2号、1949年；全集第31巻、2004年、p.665.
- (22) 柳田國男『先祖の話』筑摩書房、1946年；全集第15巻、1998年、p.48.
- (23) 最上孝敬『靈魂の行方』名著出版、1984年、p.109、279.
- (24) 井之口章次『日本の葬式』筑摩書房、1977年、p.175.
- (25) 桜井徳太郎「民間信仰と山岳宗教」『山岳宗教と民間信仰の研究』山岳宗教史研究叢書第6巻、名著出版、1976年、p.19.
- (26) 拙稿「十二山ノ神の信仰と祖霊観（上）」『福祉社会開発研究』第1号、2008年、p.154.
- (27) 堀田吉雄『山の神信仰の研究』増補改訂版、光書房、1980年、p.162.
- (28) 柳田國男『先祖の話』前掲書、p.123. なお、土井卓治によれば、死者の靈魂がおもむく所とつながるのは、そこが遺体を捨てた場所というだけでなく、かつては老人を捨てた場所でもあり、それらが相互に関係しあっているのではないかという（土井卓治『葬送と墓の民俗』岩田書院、1997年、p.70）。
- (29) 五来重「高野山の浄土信仰と高野聖」『日本の庶民仏教』角川書店、1985年、p.127.
- (30) 拙稿「十二山ノ神の信仰と祖霊観（下）」『福祉社会開発研究』第3号、2010年、p.160.
- (31) 鈴木昭英『越後・佐渡の山岳修験』法蔵館、2004年、p.60.
- (32) 柳田國男『山宮考』小山書店、1947年；全集第16巻、1999年、p.158.

(33) 井上治代、前掲論文、p.177.

(34) 五来重『葬と供養』東方出版、1992年；五来重著作集第12巻、法蔵館、2009年、p.68.

(35) 松井克浩『中越地震の記憶 — 人の絆と復興への道』高志書院、2008年、p.139.

(36) 同書、p.168.

図版

筆者撮影

第1号補遺

小松倉には内鎮守として祀られる十二山ノ神の祠のかたわらに円形の自然石が置いてある。この丸い石は前々からここにあるというだけで由来も定かではない。あるいは依代として置かれたものであり、石造や木造の祠に先行する内鎮守の古態を示すのではないかと推測されている（『民俗』p.374）。

長野県では狩人が山中で暮らす小屋に自然石を祀ることがある。川原から形のめずらしく色の美しい石を拾ってきて山ノ神の依代とした。泊まりがけで狩を行なうときは、この石に御神酒と御洗米を供えるという（箱山貴太郎「信州の山の神信仰」鈴木昭英編『富士・御嶽と中部霊山』山岳宗教史研究叢書第9巻、名著出版、1978年、p.301）。

人が亡くなると川原から石を拾ってきて墓のかたわらに置く。これを枕石と呼んでいる。墓碑の代わりにしたとも言われる（土井卓治、前掲書、p.204）。愛知県北設楽郡の山村では、私は三十三年で体を洗い神になるといって、川から枕石を一つ拾ってきて氏神のかたわらに並べる風習があるという（柳田國男『先祖の話』前掲書、p.48）。岐阜県郡上郡白鳥町上在所では、遺体を埋めた上に石を置いて祠を立てている（宮本常一『越前石徹白民俗誌』三省堂、1951年；宮本常一著

作集第36巻、未来社、1992年、p.106)。新潟県岩船郡朝日村、現在の村上市高根では、三十三回忌に川原から石を拾ってきてオサメトウバと呼んだ(新潟県編『新潟県史資料篇』第22巻民俗編1、1982、p.259)。

川原から拾うということの中には、神意による出現を暗示させるものがある(井之口章次『日本の葬式』筑摩書房、1977年、p.167)。長野県下伊那郡では、天竜川から採ってきた砂が家屋敷を浄め、穢れを祓うと信じられてきた(早川孝太郎『稗と民俗』農村更正協会、1939年；早川孝太郎全集第10巻、未来社、1988年、p.232)。枕石は西日本に多く見られるが、やはり川原や海浜から拾ってきた平たい石や丸い石が多く、集落の外から来る神の依代ではないかと考えられている(岩田重則『墓の民俗学』吉川弘文館、2003年、p.51、305)。そこに魂鎮めや浄めの効験が期待されたのか。

こうした民俗事象を列挙してそこに類似点や接点を求めていけば切りがない。事実としては内鎮守である山ノ神の祠のかたわらに丸石が置いてあるだけである。ただ『山古志村史』に掲載された写真で見ると、すべらかな自然石のようだから、川原でもなければこうした石は得られないだろう。前沢川か芋川か、それとも信濃川からか。山ノ神がもたらしてくださった家の守りとして大切にされてきたのか。今のところ村内で確認されているのは上記の一件のみだが、注意される事例である。

第3号補遺

小千谷市南荷頃在住の広井正三氏が所蔵する古文書のなかに、山古志周辺地域の修験道に関連する資料二通が含まれている(山古志村史編集委員会編『山古志村史史料一』山古志村役場、1981年、pp.320～321)。

うち一通は、古志郡蘭木村の百姓亀七が長患いの末、大峰山を信心したところ全快したので、修験道への入門を決心し、一札差出と請印をもって虫亀村(現在、長岡市)の亀宝院に弟子入りを志願した次第が記

されている。

もう一通は、同じく蘭木村百姓宇兵衛が大峰山を信心して病氣平癒したので、やはり修験道へ入門すべく、文政十二年(1829)十月に本家ならびに組頭、庄屋連名の上、蕨生村(現在、小千谷市)の法栄寺に弟子入りを志願した次第が記されている。原文は以下のとおりである。

[差上申一札之事]「古志郡蘭木村百姓、何と長々病氣_ニ付、大峯山致信心候所早速全快仕、依之修験道_江弟子入致度候故、貴寺様_江御願申上候所、早速御承知被下弟子入仕有難仕合_ニ奉存候、依_ニ師弟之結因仕候上者、万事貴院様之御下知を受如法_ニ相勤可申候、為念拙者共請印仕一札差出申候、仍_ニ如件「蘭木村「亀七「同親類「たれ 印「虫亀村「師匠「亀宝院」

[差上申一札之事]「古志郡蘭木村百姓宇兵衛長々病氣_ニ付、大峯山致信心候所早速全快仕候、依之修験道へ弟子入致度候故、貴寺様へ御願申上候所、早速御承知被下、弟子入仕難有仕合奉存候、依_ニ師弟之結因仕候上者、万事貴寺様之御下智請如法相勤、何_ニ而も可被仰付候儀少も違乱申間鋪候、若同人おいて何様之六ヶ鋪義出来仕事候共、拙者共引請貴寺様へ少も御難儀相懸ヶ申間敷候、為念拙者共受印仕一札差出シ申候、仍_ニ如件「文政十二_丑年十月吉日 うと木村「宇兵衛「本家「与三右衛門「組頭「惣兵衛「庄屋「茂左衛門「蕨生村「法栄寺様」

大峰山は早くから吉野金峰山と熊野三山をつなぐ霊山として崇拜され、天台系本山派の修験道場が置かれていた。これは前稿で述べたところであるが、八海山修験は直接には木曾御嶽の信仰につながっている(第3号、p.158)。近世以降は幕府の政策によって全国の修験者の管轄が天台系本山派と真言系当山派に二分される。八海山をひかえる魚沼地方には中世から両派の修験者がすでに定着していた(鈴木昭英、前掲書、p.8)。

いずれにしても上に引いた資料からは、修験者による加持祈禱が江戸時代末期の山古志でも行なわれており、その効験に感じて修験道への入門をこころざす者がいたことが知られる。この時代に医者はいない山間部で

病気になったとき、人々が何に頼ったかを窺うことができるだろう。その際に旧山古志村やその周辺に修験道と結びついた寺院があったことにも注意したいと思う。

謝辞

今回の現地調査は、12月15日と16日の二日間にわたって行なった。前日まで新潟県内は降雪を見なかったが、15日は長岡市周辺で朝から雪が降りはじめ、夕方までに山間部では数十センチから、場所によっては1メートル近い積雪となった。雪道で墓地を探し、写真を撮影するのは容易ではなかった。小松倉では住民の方々が、雪の降る中を墓地までの道をこしらえてくださった。翌日は晴天にめぐまれた。池谷と桂谷では、住民の方々が雪かきで忙しいところを墓地まで案内してくださった。『越後風俗志』に古志郡二十村郷の人情をたたえ、「不知の旅人もし行先の道を問ふことあれば業を抛ち先んじて五六丁の遠きも厭はず指導し」とあるのは昔のことではなかった。どなたもお名前は伺わなかったが、多くの方々のご好意で調査を行なうことができた。心からお礼を申しあげたい。

今回も長岡市役所山古志支所長の齋藤隆氏よりご高配をいただいた。記して感謝申しあげたい。